

中村武羅夫

正宗白鳥氏



正宗白鳥氏



余は、初め白鳥氏に面会した時、其描かれた作物中の人物を面のあたり見るような心持がした。

夏の初めのことである。鼠色がかつたネルの単衣を着て、少々古くなつた縮緬の兵子帯を締められた。背の低い小さい男である。色が黒く、眉が濃く、顔の何処かにほくろがあつたように覚えて居る。顔に表情のない人で、対談して居ても、少しの変化もない。始絡同じように冷たい顔をして居られる。怒って居るのだから、喜こんで居

るのだから、悲しんで居るのだから、些つとも分らない。恐らくは、又悲しむこともない人であろう。此方で何うしても、雷同して調子を合せねばならぬような話を持ちかけても、相変らず同じような調子で、少しの変化もない、気抜けのしたような気がする。何か笑わねばならぬようなことがあっても、決して声を立てて笑われない。僅かに唇の辺りに皺を寄せて、その鼠のようにこまかい歯並の好い、白い歯を見せられるだけだ。

余は、白鳥氏は冷笑以外に、情の働きのない人だと信ずる。何物も冷笑し切って居る。親も、兄弟も、友も、

吾自身すらも冷笑して居る。何うして此の人に優しい所、温かい所があるう。覺めて、冷え切った人である。笑うことも出来なければ、夢を見ることも出来ない。唯、冷やかに醒め切って居る。総ゆるものに対して、冷笑と皮肉とより外にないのだ。人生に対する興味もなければ、生に対する執着もない。面白くもなければ、又感興も湧かない。生きん為めに生きて居るの生に非ずして、肉体が未だ滅びないから余儀なく生きて居るのだ。斯う云う人は、生きたいこともなければ、また、死にたいこともないであろう。只、生まれて育てられたから大きくなり、

腹が空くから飯も食う、食うには働かねばならぬから仕方なしに働く。同じく人間と云う動物であつて見れば、生きて居る間は生殖慾の衝動も起るから、女にも接する。生きて居ることも、働くことも、飯を食うことも、女に接することも、斯う云う人にとって、決して愉快でもなければ、又楽しみでもない。只仕○方○不○良○と云うことに支配されて動いて居るのだ。則ち、一たび此の世に生を受けて生れ出でた因果に、動物性の要求に仕○方○不○良○に動いて居るのである。

由来人間の感興とか、快樂とか云うものは、現実を離



れて、夢を見るから起って来るのだ。現実を忘れて酔うことが出来る人には、感興も起れば、従って快樂もある。然かし、醒めたる人間は夢を見ることが出来ない。酔うことが出来ない。現実を離れることも出来なければ、又現実を忘れることも出来ない。夢を見て酔うことの出来ない人生ぐらい、寂しい、そして、悲惨なものが又とあろうか。元来人間の生存其物は、無意味な、そして苦痛なものである。造化は巧妙である。この苦痛なそして無意味な生存に執着させる可く、人間に夢と云うものを与えた。総ゆる希望も、光明も、快樂も、愉快も、皆夢か

ら生ずる。愚かな人間は、此の空なる夢に欺かれて、無意味なそして苦痛な生存をも楽しみ、執着する。自覚したる人間は、再び此の夢を見る事が出来ない。即ち欺かれて楽しむ事が出来ないのである。自覚したる人間は、恰度、其昔罪を知らざるイヴが、蛇に欺かれて智慧の果実を食ったそれと同じことである。一たび自覚と云う禁制の果実を食った現代の人間は、如何に悔恨しても、再び先の夢を見得られる楽しい生に還る事は出来ぬ。夢を見得られる人生をエデンの花園の君としたなら、夢より醒めた人間は、永久に冬より四季の移らぬ砂漠である。

自覚と云う禁制の果実を食った人間は、エデンの花園より、淋しい果てのない沙漠に放り出されるのだ。何処まで行っても、青い木もなければ、白い水もない。此の無味なる人生の大砂漠を、永遠にコツコツと辿らなければならぬものとしたなら、其人の心ぐらい世にも哀れな、そして悲惨なものはあるまい。近代思想の潮流に触れた人々は、皆此の無味な何処まで行ってもオアシスのない人生の大砂漠を永久に辿らなければならぬ苦痛を嘗むる悲惨な運命の人々である。白鳥氏も其一人である。

然し、同じように禁制の果実を食った人でも、或る者

は其永久の砂漠を歩むの苦痛と煩わしさに飽いて、吾と吾が手に吾が身を亡ぼして、そして、悲惨なる其運命に對する勝利の声を揚げる。之れ厭世家である。又、或物は吾が生の永遠なる無味と索莫に堪えず、己れを歎いた虚偽の生活を送って、索漠たる其生を誤魔化そうとする。まぎらそうとする。之れ所謂芝居氣のある人である。芝居をする人である。自らを欺いて一度び破れたる昔の夢を再び見ようとする。強い酒に酔い、女に惑溺して、其長い苦痛をせめて一時でも紛そうとする、これ所謂デカダンの徒だ。

余は、現時の文壇に於て、此の同じく近代思潮の動搖に触れた作家の中で、明らかに此の二傾向を代表した作家を見る。即ち一は眞山青果氏で、一は、正宗白鳥氏である。青果氏は、極度に此のデカダン思想の苦悶の影を適切に帯びた人である。己を欺き、人を欺いて堪えざる苦悶を、瞬間の夢魔に惑溺して、忘れようとして居る。それが遂には病的に第二の性となつて居る。

白鳥氏は、冷眼、白眼に世を見て、己を欺むくことも出来なければ、悪夢の惑溺もなく、荒涼たる生存を続けて居る人である。青果氏の然うした病的思想も悲惨であ

るが、考えて見ると白鳥氏の、悪夢の惑溺すらもない生存は、更に更に悲惨の極である。余は、此の比較し易き、区分の極めて明らかな二氏の性格及び其思想を研究し、論じて見たなら、極めて興味ある問題だと思ふ。

白鳥氏は消極的に強よい人である。自殺もせず、或溺もなくして、其荒涼たる生存に堪え得られる丈け、それ丈け強い人である。







日本文学電子図書館

---

現代文士廿八人

著 者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

---

日本文学電子図書館